

浄土宗のみ教え

②



浄土宗の
み教え



南無阿彌陀佛

往生之業
念佛為禱

お 念 仏

真の念仏の中には必ず懺悔と感謝の意識がなければならぬ（善導大師）

人の智慧で知ることが出来ると考えたヨーロッパの合理主義、人の智慧では思い知ることが出来ないと思覚めたる仏が阿弥陀仏であると知ったとき、心より南無阿弥陀仏と申せるなり

私達は、何かに成功すれば自信をもち、優越感をもちますが、逆に失敗するとすっかり自信を失ったり、劣等感に陥りがちです。絶えず人とくらべて安心したり、不安になったりとゆれ動いているこの心の姿を、ありのままに見つめさせてくれるのが信心です。

信心とは清浄な心

信心というと、私達が心に神や仏を信じて救われるように祈るものと考えられがちですが、それは仏教でいう信心ではないのです。信心は、「清浄な心」「無我の心」なのです。

法然上人は、この信心を保つために、次の三つの心が大切であると教えられました。

- 一、まことの心（至誠心）
- 二、深く信ずる心（深心）
- 三、仏の浄土に生まれたいと願う心（回向発願心）

念仏を称えて浄土に生まれたいと願う人ならば、どんな人でも浄土に生まれることができる。

阿弥陀仏は、さまざまな障害のために仏になれずにいる私達人間を救うために浄土をつくられ、あまなく愛と慈悲のみ光を照しておられます。しかし、阿弥陀仏の願いがあまりに大きすぎ、立派すぎて、どうしたら仏さまの願いに結びつくのかわからなくなりま

す。そんな私達に「ただ阿弥陀仏のみ名を呼びさえすればよい」と教えられたのが法然上人でした。南無阿弥陀仏と仏のみ名を呼ぶことで、私達は阿弥陀仏に会うことが出来るのです。

念仏は、ぼたん雪のようなもの（念仏の功積っていくさま）

法然上人は、阿弥陀仏の本願（ねがい）にあうためには、まず念仏を称えることが大切であると申され、くりかえし、南無阿弥陀仏を称えることが最も大切であると説かれております。

法然上人はまた、「自分の心が正しいから仏になれるとか、自分の心に汚れているから仏になれない、というようなことは気にかけてはいけません。また、私はこれだけ善いことをしたなどと誇る必要もない。ただ口に南無阿弥陀仏とお称えすれば浄土に生まれる（仏になれる）」と信じなさい」とくり返し私達に示されております。

お念仏をお称えすることが、阿弥陀仏の本願を私達に明らかにさせて下さる唯一の道だからです。私達は、この正しい行いを身につけてはげみ、永遠のいのちの中へ生まれさせていただき、正しく安らかな心で生きていく力をさずかっていきましよう。

仏さまはどこにもいらっしゃる南無阿弥陀仏

阿弥陀仏は、私達が気が付かずにいるだけで、いつも私達を見守っていて下さり、私達の心の願いや、悩み、苦しみの奥底を見ていて下さっているのです。

私達が、南無阿弥陀仏とお称えして自らを仏さまの前に投げ出したとき、私達は心のとらわれを超え、また人間的なとらわれからも離れて、真に自由に生きる人生の道が開かれるのです。そしてこれが阿弥陀仏の願いなのです。

われながら、うれしくもあるか弥陀仏の、いますみくに行くと思へば（良寛和尚）

このありのままの自分が、阿弥陀仏のみ名をお称えすることによって、浄土に生まれて仏となることが出来るという確信こそが信心であり、人生を生きる絶対の自信となるのです。

念仏生活とは、阿弥陀仏とのかわりを持ちつつ、ありのままの生活の中に生きがいを見出し（感じて）、それに全身全霊を傾けること。

他の人と、才能や財産などをくらべる必要はありません。念仏の生活を通じて、自分の仕事を忠実に、人生をおおらかな気持ちで共に生きていきましよう。

南無阿弥陀仏と自然の流れに身をまかせ。努力はしても、なるようになるを体現された阿弥陀仏。

お塔婆の功德

由来と変遷

今から二千五百年前、お釈迦さまが亡くなられて、ご遺骸を火葬にしましたが、仏舍利(ご遺骨)を当時インドで盛大な八大国に分葬されました。これに出家の時に切られた髪と、火葬の地の残りの灰で合計十基の塔が建てられ供養が営なまれました。この古くからの伝えに基き、亡者の追善供養のために建てられるようになりました。

塔婆(卒塔婆)はスツーパーの音をうつしたものです。仏舍利(遺骨)を安置した塔、つまり墓標を指します。

お釈迦さまは世間眼(せけんがん)と仰ぎ慕われましたが、仏舍利塔は遠方からでも仰いで見られるようにと高く造られました。このため塔のことを「高頭」とも云います。人々はこの塔により、お釈迦さまのお徳を慕い、そのみ教えを守り、心のよりどころとしました。

塔婆はもともと仏舍利を安置するところでありましたが、後世、仏教が広まるにつれて、その国情や人心にかなう塔が建てられるようになり、その形を変えていきま

した。

お塔婆のしくみ(構成)

この世のあらゆる存在(万有)は、地、水、火、風、空、識の六大(生命の本体)に(法界)から成り立つと説かれ、生きとし生けるものは皆、六大法身(法界)のはたらきの現われであると見なします。従ってお塔婆は五大(宇宙を構成している五つの要素)の形につくられており、識大は輪として表わしません。識(万有に遍在している常住なる精神的原理)は、あまねく五大にゆきわたっていますからお塔婆全体としては六大を表示することになります。

つまり一本のお塔婆は、一切万有の本体であり、大は宇宙を、小は人間の体を、更には法界一如、万物一如を表わし、自分と法界は一つであることを表示し、仏身を造立する志を表わします。

全国各地に、三重の塔や五重の塔がありますが、これらはみな塔婆でその心礎には仏舍利が納められています。従って塔を拜むことは塔の中の仏さまを拜むことでもあります。

お塔婆の種類

●五輪卒都婆

五輪塔とも云います。石や金属などを、方(四角)、円、三角、半月、団形(宝珠形)の五種の形として積み重ねた独特の形式です。

●板(角)塔婆

追善供養などに供える塔婆で五輪塔を簡素化したものです。板の両側に五大に相当する方、円などの形を表わし、表には五大の種子(梵字……インドの古い文字)、キャ、カ、ラ、バ、ア、を書き、その下に法名を書きます。浄土宗では梵字の代りに南無阿弥陀仏とお名号を書くこともあります。そして裏には識大の種子、建立年月日、施主名(表に書くこともあります)を書きます。

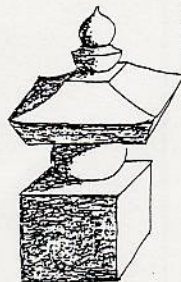
●経木塔婆(水塔婆)

これも板塔婆と同じで五輪塔婆を簡素化したものです。このように、塔婆には梵字や法名が書き込まれ、更に、仏さまのお力をいたたくべくお経をあげてご回向することによって、法名の持主はそのまま仏になることを示します。

お塔婆の功德

お塔婆供養(造塔供養)は、回

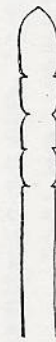
五輪塔



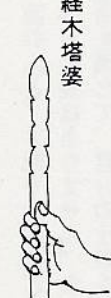
角塔婆



板塔婆



経木塔婆



向する心を何らかの形に表わそうとしたものですが、仏事の中で功德最も勝れていると云われます。

回向とは、自己の善根功德を死者にめぐらして仏道に向けしむることですが、一本の塔婆に込められた施主の追善の真心が精霊に届けられ、同時に亡者の生前の徳を彰わし、更に過去の精霊と語り合おう(見仏、聞仏)とする中に精霊は私達の心によみがえり、生き永らえることになりました。

春・秋のお彼岸、おせがき、お盆、お十夜、年回、中陰法要等、お塔婆回向をして平素のご無沙汰をお詫びし、一会の善心を廻らして供養の真心を捧げましょう。

日常生活の中の仏教用語

私たちが、日頃何げなく使っている言葉の中には、本来は仏教用語であるものが少なくありません。ここにいくつか紹介して、少しでも仏教を身近かなものとして受けとっていただければ幸いに存じます。

挨拶(あいさつ) 最近、家庭や学校、職場などにおいても、あたりまえであるはずの「おはよう」「ありがとう」「失礼しました」「すみません」等という挨拶を交わす事が少なくなったといわれています。

家庭内暴力や、青少年の非行にも大きくかかわっていて、ある教育者は、家庭内で必要に応じた挨拶がきちんと出来れば、それでも「しつけ」のおおかたは完了である、とか非行化のきざしは、衣服の乱れや派手な服装、髪かたちにも現われるが、必ず挨拶がおろそかになっているものだ、とも云っております。

挨拶も おしせまる、おし進むの意味で、主として禅宗の師匠が弟子と押し問答をしてその者の修行や悟りの深さをためす意味に用いられ、転じてお互いに言葉进行交流とか、心を開いて相対する、など、日常の暮しの潤滑油として、

人と人が心のふれ合いを持つために欠かせない習慣であり、エチケツトとして用いられております。**ガタピシ(我多彼此)** 近頃はサツシなどという便利な建具がでてきました。昔は、建てつけが悪く障子が入り込んでいても、すきま風が入ったり、建具のすべりが悪いのを「この戸は我多彼此してるとか、我多我多(ガタガタ)になっちゃった」とか表現しました。今は「何もかもガタガタになっちゃった」、「もう私の体にもガタが来た」などといいますが、これも仏教では、この世の全ての存在やでき事を、お互いに理解し、思いやり、助け合ふ事の必要性を説き自分(我)と他人(他)の区別なく、みんな仲良く暮らす大いなる縁により生かされていることを自覚する為の言葉と受けとっていいでしょう。

各々が勝手気ままな事を云ったり、やったりしたら、統制がつかせません。敷居が黙って戸や障子を乗せて滑らせる自己のつとめをはたしていれば、ガタピシはなくなります。主義主張が余り強いと、いずれお互いにガタがきてしまいます。

お数珠は仏教徒にとって最も身近な法具の一つであり、仏さまを拝む時やお念仏をお唱えする時、その数をかぞえる為に用いるので念珠ともいわれています。そして常にこれを持って阿弥陀さまを念じていれば、煩惱が消滅し、功德が得られ、極楽浄土に往生できると信じられています。

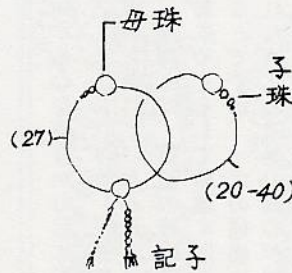
お数珠の数は百八個が基本とされ、多いものは一千八十個、少ないものは五十四個、二十七個、十四個があり、基本の百八個は百八の煩惱を意味しているといわれています。

浄土宗のお数珠には莊嚴数珠、

念珠

日課数珠があり、中でも二連になっている日課数珠は浄土宗独特のもの。浄土宗ではお念仏にむかむかに、一日少なくとも何遍以上のお念仏は必ずお唱えしますとお誓いを立てます。これを日課誓約といいますが、このお念仏の数をかぞえるのに便利なように日課数珠が作られました。これは法然上人の弟子、陰陽師阿波介が工夫したもので、一方の輪を

二十七個、他方の輪を二十又は四十個としてお念仏をお唱えする時は、一声毎に一個の子珠を繰り送っていき、一方の輪が一回りする。と他方の輪を一個繰ります。このようにして、全部繰り終ると五百又千になり、これに記子(六個と十個)を全部上げ終ると三万遍、六万遍のお唱えができることとされています。



この日課数珠の持ち方は、合掌の時は両手の親指と人さし指の間に掛けて親指の後方にたらし、合掌をしない時は左手首に掛け、又木魚を打ちながらお唱えする時は左手にて繰るようになるのが、浄土宗における正しい作法です。

平生は仕事に追われ、なかなかお念仏をお唱えすることができませんが、お誓いを立てて朝夕十遍でも二十遍でもよいですから、毎日お数珠を持ってお唱えしたいものです。